

水哉園を開いた村上仏山

修学時代を終えて

仏山は十五歳から各地の有名な漢学者・詩人について学んだ。この修学時代を終えた天保六年（一八三五）二十六歳の時、下稗田に私塾・水哉園を開いた。水哉園の名前は「孟子」という書物からとった言葉で、水の流れに源があるように、学問も根本を究めることが大事だという意味。入門者は既に寺子屋や家庭で基本的な教育を受け、年齢は十一歳から十八歳くらいの者が多かった。

水哉園の開塾初年は入門が二人だったが、次第に多くなり、毎年二十名前後になる。門人の多くは庄屋、大庄屋、寺院の子弟。在塾期間は二、三年で、常に四十名くらいの塾生がいた。当時、上稗田村、下稗田村の人口が三百名余。そこに四十名以上の塾生がいた。稗田村は今風でいえば、大きな「学園のまち」であった。

仏山は嘉永五年（一八五二）に漢詩集「ぶつざんどうししょう仏山堂詩鈔」(上、中、下編)を刊行すると、詩人として著名になる。これを契機に入門者、訪問

者が多くなる。当時、有名な詩人の私塾は人氣があつた。仏山はその後、「ぶつざんどうししょう仏山堂詩鈔」第二編、第三編を出版して、さらに全国にその名が知られた。同時に水哉園の塾風と仏山の人徳などが評判となり、入門者が増加した。

その後、小笠原の殿様から士籍を与えられた。明治になると県知事も水哉園を訪れて、詩会を開いた。

慶応二年（一八六六）、長州藩と小倉藩の戦争以降、特に多くの藩士も水哉園に入門した。明治元年（一八六八）には入門者は六十三名に達する。

水哉園は五十年近く存続し、多くの人材を輩出した。歴史家・政治家の末松謙澄、近代製麻業産みの親の吉田健作、漢学者の吉田学軒、教育者の杉山貞、官僚の安廣伴一郎、詩人の高橋種之などがいる。

(村上仏山・末松謙澄顕彰会城戸淳二)